

皇<sup>み</sup>  
子<sup>こ</sup>  
の  
劍<sup>けん</sup>

藤<sup>とう</sup>  
首<sup>みづな</sup>

亮<sup>りょう</sup>

皇<sup>み</sup>  
子<sup>こ</sup>  
の  
劍<sup>しるぎ</sup>

藤<sup>とう</sup>  
首<sup>おびと</sup>

亮<sup>りょう</sup>

父藤原鎌足の死は兄真人の死後四年、不比等十一歳の時であった。

父は五十六歳まで生き、兄は二十五歳であった。

父の歳を超えた事により、己の死が身の近くに感じ、父の行為が分かるようになった。

不比等がまだ生まれる前に、ただ一人の男子であった八歳の兄を、仏門に入れ、そして更に十一歳になると、唐へ追う非情をなぜ父は重ねたのであるのか？そうした疑問に対して、これまでは、何れ判るであろうと思ひ、先を見て考えたが、今では後を振り返り、答えを得ようとするようになった。

己が父の轍を踏んでいるからである。

二十二歳の馬養を遣唐副使に任じたことである。

藤原氏初の遣唐使高官である。

二人の兄より早い異例の抜擢である。

総勢五百五十七人が四艘で行くのである。

遣唐押使

従四位下

多治比真人 県守

大使

従五位下

大伴宿禰山守

福使 従五位下

藤原朝臣馬養

随員 判官(三) 録事(四)

請益生 従六位下 大倭忌寸小東人 二十六歳

留学生 阿部仲麻呂 十九歳

井 真成 十九歳

従八位下 下道真備 二十二歳

学問僧 玄昉

知乗船事(船長) 造船都匠(造船長) 船師(航海長) 主神(神主) 卜部・医師・陰陽

師・画師・射手・音声長 ・船匠・技師(玉生・鍛生・細工生) ・訳語・(漢・新羅・奄美)

\*請益生の**小東人**は、現行律令の改正を目指す右大臣藤原不比等の特別任務を携えて行くものであり、使節と共に翌秋の帰国が約束されていた。

他の\*留学生\*留学僧は、何時になるか判らぬ次の遣唐船が迎えに来るまで、故国に戻る当ては無いのであった。

無事に海を渡り入唐が実現しても、課せられた成果を充分にあげて帰国せねばならぬと言う重圧に耐え、異郷での孤独な勉学生活を十数年送るのであった。

前回大宝二(七〇二)年発遣の高官の帰国は

執節使 粟田真人は二年後。

副使 許勢祖父は五年後。

大使 坂合部大分は未だ帰還せず、十五年ぶりとなつた今回の船を、一日千

秋の想いで心待ちにしていることであろう。

不比等は暫く寢床に伏したまふ、眼の奥から背にかけて痛みのような痺れを感じていた。

起きようか未だ眠りを続けようか、迷いながら虫の鳴き声に耳をそばだてゝいた。

開かれた机上の史記に月光が長く届いていた。庭に降りると虫の音が止み、蛙が足元から逃げ、それを追うかのように蛇がゆっくりと横切つて行った。

月は未だ煌々と輝きながら中天にあつた。

東の方位にひと際光る星がある、見慣れた夜空であるが始めて見る様に思えた。鼻の音がくり返し聞こえて来る、闇を飛び交う鳥がいる、はるか彼方の羅城門から、すぐ近くの朱雀門に向かう、数千の官人の気配が寄せて来る。

寅の一点（午前三時）を告げる鼓が打たれ、諸門の開く響きが平城京の闇を破つた。

不比等は寢床に戻り身を横にした。

目を開けると朝日が差していた。

両手を添え史記を胸に置いた寝姿であった。

今までは、眠気が差すと書物を閉じ傍らに置き、眠ろうとしてから眠りに入っていたが、近頃は知らぬ間に眠りの淵に落ちていた。

夢をいくつか見て、どうしても思い出すことが多くなった。

庭に出て未だ峰を越えていない日輪に向かい、両手を挙げ暫く息を止め、息を吐きながら左右に円を描くように下ろし、腹のところでも両手を重ね息を止め、吸いながら又両手を挙げた。

そして、六年前の和銅三年に平城京鎮護の武神として鹿島の武御雷命を祀った、三笠山に向かって祈りを捧げた。

平城京を囲む連山の峰の天高く、鮮やかな輪郭の白雲が静かに流れている。

去年【靈龜元(七一五)年】の夏の記憶に、同じ風景があった。

梅雨明けも早く、以後雨らしき雨は無く、耐えきれぬ日の続く酷暑であった。

その日も今日の如き暑さに堪え、朝服を着て訪問者を待ちながら、遠い山なみを眺めていたが、睡魔に襲われて居た。

陽光を背にして、人影が音もなく目の前に立った。

既にこの世を去り、靈魂となつて居る多治比真人島であつた。

驚いて席を立ち、声を出そうとしたが出ず、もがく己の姿を夢にみて居た。

「おやすみのところ」

と、いう声に、それが島の嫡子の池守であることを知り、体から力がぬけた。不比等は三十二歳の春、初めて刑部省の判事に任官した。

大宝の新令で言えば従五位下相当の官職であつた。

翌月、皇太子草壁皇子 薨去。一年後、鵜野讚羅良皇后 即位（持統）

日隈（宣化）天皇玄孫多治比王の第四子島は、太政大臣武市皇子に次ぐ、右大臣の地位に就いた。

そして七年後、武市皇子が薨去すると、池守の父は太政官首座となり、大宝元（七〇一）年七月二十一日七十八歳の死までの五年間、その地位を保つた。

武市皇子より五歳、不比等より三五歳、年長であつた。

鎌足亡き後に、氏上を継いだ父の従弟中臣連金が、壬申の乱首謀者として斬首

されたのであり、朝堂に於ける不比等の立場は微妙であつた。

そのように孤独な不比等を池守の父は、陰に陽に後ろ盾となつて励ました。

まだ虚ろな不比等を覚醒させようとでもするかの如く、池守は声高に言つた。

「この度、父の十五回忌法要に際しては藤原・中臣御一族百を超す、多数の方々  
の威風堂々たる御参列を賜り、我等の荣誉であると伴に、父の霊も喜んでいと  
信じます」

池守は一礼し、そして続けた。

「だがしかし、皇親の血脈とは言え、吾等は六世孫にして既に臣下の身、如何  
に亡父に恩顧を受けたるにせよ、吾等には分に過ぎたる大人数であり、人々を驚  
愕させました」

池守は又一礼して、更に続けた。

「首皇太子も元服の慶事を迎えました。 明年にもご即位あつて然るべきで  
す。

機は熟し右大臣のご決断あるのみです。二代続く女帝は極めて変則であり、国  
の行く末を考える時、これは速やかに止むべきです」

池守は此処で又一礼し、深く息を吸い、一段と語調を強くした。

「首皇子ご即位反対者は藤原氏への挑戦

であり、これは出現致さぬと観る。

だがしかし、藤原宮子夫人を皇太后と呼び、藤原安宿媛を皇后と呼ぶ、此の事は明らかなる違令であり、皇親を中心とする反対勢力が生まれる危険を孕む。中心とは長屋王也。

純真である彼には看過できませぬ。

吾、この度太宰帥を拝命、任地赴任を前にして心情を吐露致しました。

大事を控えたこの時期、藤原氏専横の観念を、皇親並びに他氏に抱かしめるが如き、過剰な行動はご自重されますよう」

不比等は臉を軽く閉じ聴いていた。

島大臣への報恩の真心があのような人数の形になった。

それが他者の目には、藤原一族の威勢の誇示と見えたのか。

驕り高ぶると外孫の首皇子即位に及ぶと言うのか。

池守が一礼して去るのを気配で感じ目を開くと、不比等の愛鳥の鶴が羽音を響かせ舞い立つのが見えた。

不比等は廊下に走り出て、純白の孤影が天空に吸いこまれて行くのをじっと眺

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。